水底に眠る鉄の漁礁

―慰霊際に参加して思うこと

塚田昌弘　宇都宮市

●歴史は勝者によって書かれる

私は「八重の桜」というテレビの番組を大変関心を持って見ています。昔から、The history is written by winner.（歴史は勝者によって書かれる）といわれていますが、「八重の桜」では、舞台になっている会津は敗者ですから、そういう立場から歴史を見直すということは、大事なことだと思うからです。

第二次世界大戦後の極東軍事裁判で、日本は勝者によって裁かれ、その結果、日本の軍人や政治家、国民が全部悪いということになりました。勝者のアメリカにもいろいろあったはずですが、それには全然触れていない。また第二次世界大戦についてのドイツのニュルンベルク裁判では、ドイツが一方的に批判されている。いつの時代も勝者によって歴史が語られるのです。

●歴史から未来を学ぶ

歴史から学ぶということは非常に大切なことだと思います。英語で歴史をhistory（ヒストリー）といいますが、これを二つに分けると、hi+story（ハイ＋ストーリー）、面白い物語という意味になります。

たとえば、サッカーでは相手がシュートを打ったとき、ゴールキーパーは、そのボールの方向、速さ、角度などを見て守ります。歴史も同じで、ここまで来た過去の歴史を学ばないと、政治・経済も、あるいは会社の経営も、あるいは自分自身も、これからどういうことをしなくちゃいけないのか、判断がつかないと思います。

日本は第二次世界大戦で３００万人もの尊い生命を失い、大変残念なことでした。しかし、そのことを風化させずに、そこから教訓を学んでこれからの世代に生かしていくことが、我々の大事な務めだと思います。

●かつての日本の領土

二〇一二年の11月にガダルカナル島に、その前にはトラック諸島にも慰霊に行きました。

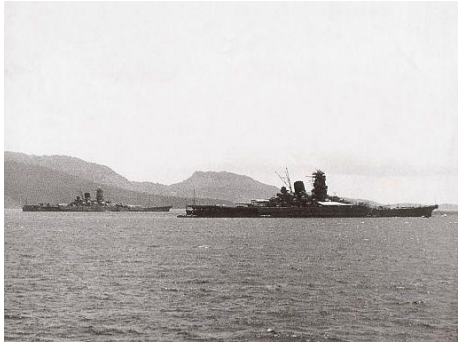
日本の昔の地図をご覧になったことがありますか？　今の日本の何十倍という広い領土でした。トラック諸島とか、サイパン、テニアンなど、戦前は日本の委任統治地区でした。日本はそれらを30年間統治したので、その島々に行くと、お年寄りは日本語を話せるし、日本の童謡も歌っています。日本の国語の教科書、修身の教科書、いろいろ習ったと言っています。

それらの委任統治地区はドイツの鉄血宰相といわれたビスマルクの名をとってビスマルク諸島と呼んでいました。

ベルサイユ講和会議では、このビスマルク諸島をどこの管轄にしようかと議論になり、なかなかまとまらなかった。アメリカは米西戦争といって、スペインと戦争をして勝ったので、フィリピンを植民地にしました。そして中南米の国などもスペインから取り上げて、アメリカにしました。そういう経緯から、アメリカは侵略をする国だからまずい。それならイギリスとフランスはどうかというと、仏英戦争をしたり、あるいはドイツとフランスも普仏戦争、フランスとプロシャも戦争している。それでまとまらず、日本の委任統治地区になったいきさつがあります。

●トラック島に南洋庁が設置される

委任統治領としての南洋庁の支署はトラック島に置かれました。トラック島の人たちは最初はドイツの教育を受け、その後の日本の統治時代は、日本の教育を受けました。そして戦後は、アメリカ統治になりましたから、アメリカの教育も受けました。島民に、どこの教育が良かったかを尋ねると、日本時代の統治がいちばん良かった、と言っています。島民がそう言っているわけですから、日本はもっと世界に向かって、日本の教育は素晴らしいんだと、自信をもっていいと思います。



左：大和、右：武蔵（1943年、トラック島　写真：ウイキメディア・コモンズより）

さて、そのトラック島ですが、天然の良港といわれていて、日本の海軍が力を入れ、軍港にしていました。この写真ですが、戦争中に、大和と武蔵という日本でいちばんの軍艦が2隻そろった写真です。トラック島は潜水艦が非常に入りにくいところだったので安心しておけたようです。山本五十六（やまもといそろく）元帥もそこによくいたそうです。ラバウルからブーゲンビル島を経由して、ガダルカナルに視察に行くとき出発したのがトラック島でしたが、ブーゲンビル島で戦死してしまいました。

トラック島は日本の重要な海軍根拠地となっていたが、米軍の反攻が徐々に激しくなり、昭和19年の2月18日、アメリカは猛爆撃をして、一晩で輸送船や軍艦、60何隻の日本の船を沈めてしまった。その海にはたくさんの船が沈んでいますから、The bottom of iron（鉄の底の海峡）という名前が付いている。おびただしい数の日本の船が沈んでいるそうです。

●沈んだ船が漁礁となってダイバーのメッカに

沈んだ船を漁礁にして、魚がたくさんいますから、ダイビングをするには良いところです。世界でいちばん面白いところだと、世界中からダイバーがたくさん集まります。夜になるとビーチのレストランなどで、海の中を撮ったビデオを客に見せたりしています。そして、「こんな面白い所はない」と言う。

昼間、ビーチでは、裸に近いビキニスタイルで、潜ったり泳いだり、きゃあ、きゃあ歓声を上げている。それを横目に、こちらはお坊さんが読経をして、慰霊際を行っている状況です。皆、頭を垂れている。戦争があって大勢の犠牲者が出たという、こんなに悲しい、つらいことはないです。お坊さんが、

自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く経蔵に入りて、智慧海のごとくならん。

〈三帰依文より〉

と、そう詠っている。この経文は「深く経蔵に入りて弔えば、知恵は海のようにわいてくる」という教えですが、そこの海峡は、亡くなった兵隊さんや輸送船の船員さんの涙で満たされていたのではないか、そう思うと、不思議に涙が出ます。我々は供養して泣いているのに、ビーチでは裸に近い恰好で、きゃあ、きゃあ楽しそうに遊んでいる。そのコントラストがあまりにも大きいので、驚くばかりです。戦争をするというのは悲惨なことなんだ、というのがよくわかります。

海上で、ウォーターリリーというユリの花を投げて、靖国神社で頂いてきたお酒を船上からまき、そこを去りました。花は沈むかと思ったら、いつまでたっても沈まない。不思議ですねえ…見える限り見ていましたけれど、ウォーターリリーは沈まない。まるで、戦死者の魂が「帰らないでください」と言っているように思えて、本当に涙が出てきました。

戦争というものは、絶対に避けなければいけない。と同時に、国力というものを持たないといけないと思います。日本人は、愛国心というものを忘れているように思います。「国を愛する」ということを忘れては、いくら平和を叫んでみても平和なんて来るものではありません。

●激戦地ガダルカナルは南方の要

日本は真珠湾攻撃で勝ったつもりでいたら、アメリカのB25が東京を空襲しました。そして名古屋、北九州を爆撃してB25がどこかに行ってしまった。B25の航続距離や滑走路の長さを考えても、

どこから来たのか、日本はわからなかった。驚いたことに、アメリカのホーネットという航空母艦からＢ25は飛び立っていた。しかし、ホーネットから離艦はできても、着艦はできない。東京、京浜工業地帯を爆撃後、北九州を爆撃して、中国の成都とか、重慶に戻って行ったのです。

日本はミッドウェー戦で航空母艦を４隻も沈められてしまっていたので、大変なことになったと、ラバウルを守るために、ガダルカナルに飛行場を作った。そこから飛行機が飛び立ってアメリカを攻撃するための南方の要にしようとしました。オーストラリア、ニュージーランド軍も連合軍ですから、日本に攻めてくる可能性をそこで阻止しようというのが日本の考え方だったわけです。そこに２５００人くらいの工兵隊が上陸して飛行場を作ったそうです。

できあがったと思ったら、アメリカの偵察機から照光弾が落ちてきて、夜なのに昼間みたいになった。どうしたのだろうと思っていたら、アメリカの戦艦などが80隻も集結していて、そこからの艦砲射撃があった。そしてアメリカ軍が１万２００人も上陸して、占領されてしまったのです。ガダルカナル島は、太平洋戦争で最初の激戦地だった。

日本が作った飛行場を、その後アメリカが拡張し、そこから日本に対して爆撃ができるようにした。日本まで往復で６０００キロぐらいですから、Ｂ29の射程距離に入ってきた日本の都市は猛爆撃を受けてしまいました。

鹿沼は爆撃を受けなくてよかったと思います。帝國製麻があったから、だいぶ艦載機が飛んできたそうですが、Ｂ29の爆弾は落ちなかったですね。宇都宮はものすごい爆弾が落ちてひどかったですよ。7月12日に、Ｂ29が５００機、南洋の沖ノ鳥島から三つに分かれて、その一つの編隊が１５０機くらい宇都宮に来て爆弾を落とした。もう、火の海です。何もなくなってしまいました。

●時代錯誤の戦い方

日本は、こんなに苦労して作った飛行場を取られては大変だ、ということになったとき、撃墜王と言われた酒井三郎を隊長に、日本のゼロ戦が17機、奪還に来た。それを迎え撃つアメリカの、グラマンのワイルドキャットという戦闘機が77機。空中戦で酒井三郎が、アメリカのグラマンを37機撃ち落とした。日本の未帰還機は2機。それだけの戦果を得て、ラバウルに引き上げていったという逸話があります。

さて、日本は、輸送船をあまり狙わなかった。輸送船には大砲や弾薬、それから食糧も積んでいるので、安全に上陸してしまうと、ものすごい戦力になるわけです。日本は昔からの武士道精神を持っているためか、戦艦とか、駆逐艦とか、巡洋艦などを狙うこと以外は頭になかった。

また、当時、陸軍士官学校でいちばん価値のある所は騎兵科。次は歩兵科なのです。輸送などを担当するのは輜重科（しちょうか）といって大事なところですが、いちばんランクが低い。そのころのアメリカは、モータリゼーションが進んでいて、騎兵なんて一人もいないです。アメリカはもう原爆を落とそうという時代なのに、騎兵が偉いだの、歩兵が偉いだの、言ってるような場合じゃない。時代錯誤していたと思います。

ソロモン海戦のときの井上成美（いのうえしげよし）という海軍の提督は弱い提督だというので、海軍兵学校の校長になりますが、最初は、弱いというので生徒に評判が悪かったそうです。しかし、海軍兵学校では入学試験に英語を最後まで採用した。陸軍士官学校は英語の試験を採用しなかった。世界の潮流を見通すことに陸軍士官学校は欠けていたと思います。

●遅れたポツダム宣言受諾

もっと早く、あと5ヵ月も前にポツダム宣言を受諾していれば、沖縄戦争もなかったし、広島も長崎の原爆もなかったわけです。なぜ受諾が遅れたのかというと、軍部が国体護持（天皇制を守るこ

と）にこだわったからです。それでなかなか受諾できないでいるうちに、日本の都市がその後60何都市も爆撃を受けました。もうあと1ヵ月あったら、鹿沼も爆撃されていたかもしれません。

それが天皇陛下の決断で、ポツダム宣言を受諾した。陛下は、第一次世界大戦のあとヨーロッパを視察していたのです。

そもそも、イギリスでは「ウインザー公とシンプソン夫人の恋」の逸話がありますが、ウインザー公は王位を捨て、シンプソン夫人と結婚した。そのため、王位を継いだジョージ6世の戴冠式に、天皇陛下が大正天皇のご名代で行き、そのとき、西部戦線、ヨーロッパを視察していました。

第一次世界大戦は塹壕戦で、塹壕が多く、その中には腐乱した死体があり、そこへネズミが巣を作ってペストが蔓延し、当時はものすごい状況だったことでしょう。陛下が視察したのはもっと後で、少し落ち着いた状況だったと思いますが。

レマルクの小説『西部戦線異状なし』にあるように、前線では悲惨な戦いをしているのに、参謀本部に打った最後の電報は「西部戦線異状なし」だった。このように、現場とトップのところに入ってくるニュースというものは違う、ということを陛下はよくわかっていたのですね。日本はいろいろのところで苦戦し、犠牲を払っているというのを、陛下はもう知っていたので、軍部が反対しても受諾しようと、ご聖断を下された。

もし陛下が、「最後の一兵まで戦え」と言ったとしたら、私たち国民は喜んで戦ったと思います。私は小学校4年生だったけれども、終戦を伝えるラジオ放送を聞いて、周りの大人はみんな泣いたのを見ています。「戦ってくれ」、「悔しい」と言って。しかし、陛下は戦いをやめようと言った。

●感謝の気持ちを

私は靖国神社で買ったお地蔵さんをガダルカナルの激戦の地に埋めました。

「つゆ　野の道に、笑顔涼しくおわします。山寺の門のある所、笑顔明るくおわします」

というお地蔵さんですが、泣いてる地蔵はいないのです。いつも笑顔です。そして温かいですね。「地蔵」というのだから、土の中に埋めました。慰霊碑は設営されているので、食料品などをあげて供養してまいりました。

ガダルカナルでは、約2万人の日本の将兵が亡くなったそうです。弾に当たったりして死んだ人は5000人で、残りの1万5000人は食べるものがないという、餓死です。アメリカ側もガダルカナルで5000人が亡くなったが、餓死者はいない。

貴重な日本の悲しい経験を教訓として、歴史に生かしていかなければならないと思います。亡くなった英霊に対して、感謝の気持ちというものを忘れてはいけない。いくら時間がたとうとも忘れては申し訳ないという、そういう気持ちでいます。

〈二〇一三年3月、鹿沼市倫理法人会主催　講話より要約〉

慰霊碑の前で法要を営む慰問団
（ガダルカナル島で）

現地に残された大砲にまたがって遊ぶ子どもたち。手前に兵隊が残したヘルメットも見える